

1. はじめに

自分にとっては2度目の在外教育施設への派遣となった今回。前回はアラブ首長国連邦アブダビ日本人学校での勤務。そして今回は、アメリカニュージャージー日本人学校での勤務となりました。国も文化も違う2つの日本人学校でしたが、それ以上に派遣される自分の立場が大きく違っていました。

今回は、教頭としての派遣。前回とは仕事の内容も、学校経営に対する考え方も大きく違いました。

そこで今回は、ニュージャージー日本人学校での実践を例に挙げながら、海外における学校経営について感じたことを紹介しようと思います。

2. 派遣国並びに地域の概要について

今回派遣された国は、アメリカ合衆国。日本とはあまりに関係の深い国ゆえ、多くの説明は必要ないと思いますが、簡単にアメリカの歴史をなぞってみます。

アメリカ大陸における植民地建設は、1492年コロンブスの大陸発見（ヨーロッパ人で初めてアメリカ大陸に到達）から1世紀後の1607年、バージニアのジェームスタウンにイギリスが植民地を建設したことに始まりました。次いで、カナダ東岸のフランス植民地（1608年）、ハドソン川流域のオランダ植民地（1609年）がそれぞれ建設されています。18世紀中頃、イギリスの一方的課税、自治の抑制が植民地を刺激し反英運動が起きました。1774年9月第1回大陸会議で各植民地は結集し、1775年4月独立戦争に突



入し、1783年正式に独立承認を獲得しました。独立した東部13州は、強力な連邦政府を実現するため、1787年フィラデルフィアで憲法制定会議を開催し、合衆国憲法を制定しました。初代大統領には独立戦争の指導者ジョージ・ワシントンが選ばれました。

政治や外交などあらゆる面で、アメリカ人は法律という「約束事」によって社会を動かしています。風俗や習慣、物の考え方の全く違う移民たちが、世界各国からアメリカに渡ってきました。同じ土地で一つの社会を形成していくには、法律を極めて厳格に運用する必要があったのです。「人種のサラダボウル」（「人種のるつぼ」から改名）と呼ばれているアメリカでは、法律によって社会を動かしていくしかないということです。

3. ニュージャージー州について



私の派遣地は北アメリカの東海岸に位置するニュージャージーという州です。ニュージャージー州と言っても、あまり知られていないのが現状なのではないでしょうか。正直私も赴任地を初めて知らされたときには、ニュージャージー州がアメリカのどこにあるのかわかりませんでした。

ニュージャージー州は、南北208 km、東西145 km、20175 km²の面積をもつアメリカで5番目に小さな州です。日本と比較すると岩手県（15279 km²）より一回り大きい広さで、青森県とほぼ同じ緯度に位置しています。北西にアパラチア山脈、東西はハドソン川

とデラウェア川に挟まれ、南は大西洋に面しています。海岸線の全長は、210 km。州内には 40 の州立公園と 11 の州立森林、約 800 の湖があります。また、緑が多く、農場や牧場など自然環境に大変恵まれていることから「ガーデン・ステイト」とも呼ばれています。

ニュージャージー州はニューヨーク州に隣接し、その北部は主にニューヨーク・マンハッタンに住む人々の別荘地として位置づけられていました。また、ニュージャージー州の南部は工業地帯として、かつて多くの労働者を抱える地域でした。

ニュージャージー日本人学校（以下 NJ 校）のある地域は、ニュージャージー州の北バーゲン郡・オークランド市に位置し、とても自然に恵まれたところです。

学校の周りには野生の鹿やリス、ウッドチャック（グラントホッグ）と呼ばれる動物も目にする事ができます。また年に数回野生の熊も見かけるような場所です。

また学校周辺には多くの木々が茂り、校門の前には NJ 校のシンボルとも言われている大きなメイプル（かえで）の木がそびえ立っています。校舎を囲む樹木たちは、春から夏にかけて瞬く間に目にまぶしい緑色となり、秋には一斉に紅葉となり再び目を楽しませてくれます。



一方、そんな自然に恵まれた地でありながら、ニューヨーク・マンハッタンまでは、車で1時間もかからぬ場所です。したがって休みの日には多くの人々がマンハッタンへ出かけ、本物の芸術や文化、そしてスポーツに触れることができます。

【ニューヨークと東京の気温の差】

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
NY	0	1	5	10	17	21	24	22	21	14	9	3
東京	6	6	9	14	19	22	25	27	24	18	13	8

4. 北米地区における在外教育施設

(1) 日本人学校



北米にある日本人学校は、全部で3校しかありません。ニューヨーク日本人学校・シカゴ日本人学校、そして NJ 校です。日本人の子弟が少ないかと言えば決してそんなことはなく、現在北米地区に滞在する就学義務のある子供たちは、およそ 22,900 人（文部科学省「海外で暮らす日本人の子供たち」平成22年度版）もいます。しかし、そのうち日本人学校へ在籍している児童生徒は約 400 人に過ぎません。全体のたった 17 パーセントです。

NJ 校の児童生徒の在籍数は、平成 22 年度末現在で 80 名でした。アメリカに住む日本人の子供たちのうち、ほんの一握りの児童生徒が通ってきているというのが現実です。

その理由については後述することとします。

(2) 補習授業校

一方、補習授業校は北米地区だけで 87 校も存在します。ほぼ北アメリカ大陸東側に多く存在していますが、そこで学ぶ日本人の子供たちの数は、およそ 11,200 人です。すなわち、北アメリカ大陸に住む日本人の子供たちの半数近くが補習授業校を利用していることになります。

(3) 私立在外教育施設

義務教育段階の児童生徒を受け入れている私立日系の学校は、たったの2校に過ぎません。東海岸と西海岸に1校ずつあるだけです。なお、西海岸地区にはほとんど日本人学校が無いので、全日制日本人学校への入学を希望する子供たちは、私立の学校を選択することも希ではありません。

(4) 現地校の教育事情

アメリカには教育局 (Department of Education) はありますが、日本の文部科学省のような全国的規模で強力な統制力をもった機関ではありません。そのため義務教育は、各州の教育委員会に全てを委ねられており、各学区 (School District) の教育委員会が管轄の義務教育を運営しています。

ニュージャージー州においては、それぞれタウン (町) ごとに教育委員会 (Board of Education) があり、独自に運営されています。公立の小・中・高校はパブリックスクールと呼ばれ、授業料は無料ですが、選択科目によっては教材費をとるところもあります。

学校には、カリキュラムのスーパーバイザーがいて、教育課程についてアドバイスを与えたり、チェックをしたりしているようですが、担任が教科書を決めることが多いと聞いています。

日本のように「National Standard」としての学習指導要領をもち、国民が等しく学べることはたいへんよいことだと考える現地校の先生もいます。

本校のあるバーゲン郡では、日本と同じような義務教育年限制ですが、幼稚園 (1年)・小学校 (4年)・中学校 (4年)・高等学校 (4年) を義務教育にしている郡や町が多いようです。

5. 日本人学校は不人気なのか

(1) 教育の質

全世界の在外教育施設 (私立を除く) には、日本の各都道府県から選抜された教員が文部科学省での面接試験を通過して採用されています。よって教師の質 (教育への情熱や指導技術) は高いと言えます。

また、各地区での先進的な実践者が集まり、それぞれの地区の優れた教育実践を交流しながら授業をおこなっています。それにより、日本国内では考えられないほど水準の高い教育を行なっています。

NJ 校もその例外ではなく、一人ひとりの教員のレベルは驚くほど高いものがあります。

さらに NJ 校では、週の授業時数を30時間 (月曜から金曜まで毎日6時間授業：小学校1年生～中学校3年生全て) で実施しており、質・量共に学力向上へ向けての指導をおこなっています。

また、アメリカの教育制度にのっとり、ESL (第二外国語：英語) の授業も取り入れ、正規の教育課程に加えて小学校1年生から英会話の授業も実施しています。その成果は存分に現れ、小学校4年生でも実用英語技能検定 (英検) 3級程度の資格を有する児童が多数います。中には小学校3年生で英検2級 (準2級ではなく) の試験に合格した子どももいるくらいです。





しかし、現地校人気は日本人保護者の間ではまだまだ高く、ニューヨーク・ニュージャージー地区にいる学齢期の児童生徒の8割が現地校に通っている事実があります。これは、現地校の授業料が無料であること（ちなみにニュージャージー日本人学校の授業料は、年間70万円程度必要）。ほとんどの現地校が「door to door」のスクールバスでの送り迎えがあること（ニュージャージー日本人学校にもスクールバスはありますが、バス停が限られており、その場所

まで保護者の送り迎えが必要）。そして何よりネイティブの英語に毎日触れられることが大きな原因であると言えます。せっかくアメリカで生活するのだから、子どもたちには生きた英語を身につけさせたいと考える保護者が多いのです。

同時に、現地校に通いながらも日本の教育を受けさせることができるシステム（補習授業校）が設置されていることから、日本人学校へ通う児童生徒が少ないという現象が起きるのです。

（2）子供たちの生活

現地校や補習授業校へ通う児童生徒と、日本人学校へ通う生徒には、生活面でも大きな違いが見られます。現地校へ通う子供たちは、月曜日から金曜日まで現地校で授業を受け、土曜日に補習授業校へやってきます。現地校での宿題も多く、さらには週一回の補習授業校でも相当量の宿題が課せられます。従って、家での学習量も相当なもので、現地校と補習授業校の宿題に家庭での時間のほとんどを費やすこととなるようです。

一方日本人学校の児童生徒は、学校での宿題は出るものの、基本的に土曜日曜は自由な時間であり、地域のスポーツ団体に所属したり近隣の博物館や美術館、科学館などを見て回ったりしています。どちらが良いとか悪いとかではなく、通う学校によってその生活ぶりも大きく変わってくるのが事実です。



ところで、現地校と補習授業校の両立が大変で補習授業校をやめてしまったり、現地校を離れて日本人学校に編入してくる児童生徒も少なくはありません。英語環境になじめず、学校不適應を起こして日本人学校へ編入してくる子供もいます。そういった子たちも、日本人学校での生活は全く日本と同じであることから、安心して授業を受けて毎日楽しく生活しています。

現地校に通っていた子どもの話では、自ら積極的に自分を表現できないと、現地校での友達作りは難しいということでした。イエス・ノーをはっきり言うことが、まず大切だということです。

6. ニュージャージー日本人学校の概要



マンハッタンを中心としたニュージャージー、ニューヨーク、コネチカットの3州はトライステートと呼ばれていますが、8万人以上の日本人が住んでいると推定されています。

このニューヨーク地区に住む学齢期の日本人子弟は、前述したとおり全日制の日本人学校や現地校に通い、さらに現地校に通う児童生徒の多くが土曜日のみの補習授業校に通っています。

『ニューヨーク日本人教育審議会』が、ハドソン川から西のニュージャージー州側にニュージャージー日本人学校・ニュージャージー補習授業校、また、ニューヨーク州側にニューヨーク日本人学校・ニューヨーク補習授業校の4校を運営しています。

児童生徒が NJ 校に通学している理由は様々です。「保護者の赴任期限が3年から5年と短く、学習言語をマスターするには大変だから」「日本の教育をしっかりと身に付けさせたいから」「高校受験に備えて」「現地校と補習授業校との両方の学習を同時にこなすのが大変で」「子ども本人が日本人学校に行きたいと言うから」「ニューヨーク地区にある日本人学校は評判がたいへんよいから」などがあるようです。

日本の学校から直接入学・編入した児童生徒が多くいますが、現地校に通った経験のある児童生徒もいます。

子どもたちの学力は平均して高く、また、学年が高くなるにつれ塾に



通う率が高くなっています。今までの9年生（中学3年生）のほとんどが、日本の高校に進学しています。進学に対する熱意も強く、一人で5校以上の受験を試みる児童生徒もいます。家庭環境もしっかりしています。



本校があるオークランド市はニュージャージー州北部のバーゲン郡にあります。ニューヨーク市との境界からは車で40分ほど西へ走った所です。校舎は広葉樹に囲まれた閑静な環境の中にあり、建物はカトリックの教会の一部を借用しており、以前は教会関係の学校として使われていたものです。施設を教会から借りているため、行事等の実施に

当たっては双方の緊密な連絡調整を図る必要があります。

子どもたちは自然に恵まれた環境の中で伸び伸びと学習活動に励んでいます。

本校特有の学校行事もあります。たとえばマンハッタンでのグループ活動、ファームでのパンプキンピックなどの校外学習は、地の利を生かした学校行事となっています。また、学校近くにある現地の学校との交流を通し、アメリカ文化の理解や日本文化の紹介に努めています。

その他の行事として代表的なものは、5月に行う運動会、10月に行うメイプル祭（学習発表会）があります。どちらの行事も子どもたち、保護者が楽しみにしており、多くの方が参観されます。「児童生徒集会」や転出する友達を送る「お別れ集会」などは、2時間目と3時間目の境にある30分休みの「メイプルタイム」に行っています。これらは、1年生～6年生と7年生～9年生までの縦割りの委員会活動で、子どもたちの企画・運営により実施しているものです。



7. 生活全般に関わって

(1) 食料品

生活に必要な食料品は、スーパーマーケットでの購入が一般的です。日本のスーパーとシステムは同じです。日本に比べて大型の店舗で、品数も豊富です。日本の食料品を扱っている店もあります。ただし、日本食は日本で買うよりも 1.5 倍ほど割高になります。

また、こちらにはいろいろな種類のレストランがあります。一般のアメリカ人は、デリカテッセン（サンドイッチ）や中華のテイクアウト、ピザ店、ファストフード店などを利用しているようです。価格は高いですが日本食のレストランも多くあります。



(2) 住居

現在派遣教員は学校から車で 30 分以内の治安の良い地域を選んで住んでいます。また、ニュージャージー全体が緑の多い地域ではありますが、教員の住宅も緑あふれる場所を選んで住んでいます。冬は雪も積もり、交通が寸断される場合も考えられますので、交通の便のいい（比較的一本道で通勤できる・ハイウェイを利用して通勤できる）などを考慮に家を決めています。もちろん、住む上で便利な場所を選ぶようにもしています。そのため、大抵の住宅のそばには、スーパーマーケットや銀行があります。



教員が住む家はそれぞれ多少の違いはありますが、一軒家の場合の共通している部分を紹介します。まず、冷暖房は必ず完備されています。部屋ごとあるいは家全体の違いはありますが、夏の暑さ・冬の寒さを防ぐため設置されています。

また、ほとんどの家にベースメント（地下室）があります。多くは洗濯機があったり、乾燥機があったり、暖房用のボイラーがあったりしますが、家によっては子どもたちの遊び場になったりしている例もあります。

アメリカ人はバスタブに長くつかう風習はありませんので、湯船につかることはなく、基本的にはシャワーです。シャワーの水量も限られている場合があります（ボイラーの大きさや温水をためておくタンクの容量に限りがあるため）、一度に大勢の人間がシャワーを浴びてしまうと最後に水になってしまう例もあります。

多くの家には居間を始め、ほとんどの部屋にあらかじめ照明が設置されていない場合が多いといえます。その場合は家具店や電化店から照明を購入する必要があります。蛍光灯がついている部屋はほとんどありません（間接照明になります）。

また、ほとんどの家には前庭（front yard）と裏庭（back yard）がついています。そのどちらも芝生が張ってあります。その芝の手入れは、自分するのが基本です。大家さんによっては、業者にすでに頼んでいる場合もありますが、芝への水やりは自分自身が行うことが通例です。特に前庭の芝を枯らしてしまうと、地域の景観を損なうということから、近隣の住宅から苦情が出てタウンからの指導を受ける場合もあります。

(3) 医療

医療内容、技術とも高度で安心できます。しかし、日本といくつか勝手の違うところがあります。

①ホームドクター制が一般的

内科・小児科などかかりつけの医者がホームドクターとなっています。風邪などの場合、注意事項を教えてくれたり、処方箋を書いてくれたりします。入院や検査が必要な場合は、すぐに集中医療のできる総合病院を紹介してくれます。アメリカに来て、ホームドクターをつくるのは簡単です。風邪をひいたときなどに、「初めてですが・・・」とその医者へ行けばいいのです。

②予約が必要

救急病院以外は、予約がないと診てくれません。予約は電話でします。日本語の通じる受付・医師がいる病院もたくさんあります。

③医薬分業が一般的

ホームドクターの場合、薬の処方ほとんどありません。処方箋をドラッグストアなどに持って行き、薬を調合してもらいます。

④社会保険制度がない

かかった医療費は、国が負担するのではなく、個人の責任において払うというのがアメリカの現在のシステムです。

⑤医療費が高い

風邪でホームドクターにかかって処方箋を書いてもらうだけで、\$ 100 近くかかることもあります。その上、薬は別に買わなければなりません。歯医者に行って、普通に治療してもらうと、1回 \$ 300 ~ \$ 500 ぐらいかかります。ちょっと治しただけで数千ドルかかる場合もあります。病気や怪我で入院すれば、1日 \$ 1,000 以上かかることも珍しくありません。救急車を利用しても、後で数百ドル~千数百ドルの請求が来ます。

8. ニュージャージー日本人学校の学校経営（教頭として）

この3年間、2人の校長先生に仕え、それぞれの校長先生のもと、「何をどうすべきか」を考えながら仕事をしてきたつもりです。しかし、日本の学校事情と最も大きく違っていたのが、「子どもをどう確保するか。」ということでありました。NJ校は日本の公立学校とは違い、保護者からの授業料で施設を維持したり、備品を購入したりすることになります（派遣教員の手当は別です）。

すなわち、子どもの数が減ってしまうと、学校の金銭収入が減り「赤字」となってしまい、学校を維持できなくなる危険性があります。ですから、子どもたちを学校に集めるための努力をしなければなりません。まさしく経営そのものが問われるのです。

子どもたちの数を増やすためには、なんと言っても、「魅力ある学校」「親が行かせたい・子どもが行きたくなる」学校を作ることが大切です。

先に記したとおり、ニュージャージーには日本人学校を始め、他にも学校の選択肢がいくつもあります。その中で本校を選択してもらうためには、何を売りにするのが大切になってきます。施設設備も十分ではなく、スクールバスの便も悪い。現地校と違って高い授業料が必要となる NJ校です。そうするとまさしく教育の質を高めることが最も重要となります。

そして同時に本校の良さを宣伝することが必要です。授業改善を目指し教職員全員で研修に励み、授業の質を上げることを力説しました。一方では、日本人学校がいかに素晴らしい学校であるかの宣伝にも力を入れました。

待ちの姿勢では子どもたちは集まってきません。ことあるごとに、学校での出来事や子どもたち・保護者の声を外部に公表することに専念しました。また、外部からの問い合わせ（もちろん日本からのものも含め）には、できるだけ丁寧に対応することを心掛けました。メディアも大いに利用しました。

結果として、一時期50名を割ろうかという児童生徒数でしたが、私が帰国する直前には90名を数えるまでに子どもの数が増えました。これはひとえに、教職員全員の努力が実った結果だと自負しています。

以下、教頭として意識した点を整理しておきます。

- ①授業の質を高めるための研修を教職員一丸となって取り組んだ
- ②今いる子どもたちを大切にし、子どもたちの満足感を高めた
- ③その結果、保護者の満足感も高まり「ロコミ」の宣伝効果が得られた
- ④フリーペーパー、地元にある日系のメディアを利用し、日本人学校の存在をアピール
- ⑤外部（アメリカ国内・日本から）の問い合わせに対して、正確に丁寧に熱心に対応した
- ⑥ホームページの即時的な更新や、学級・学年便りの工夫を行った
- ⑦後追的な学校日より（終わった行事の報告）を廃止し、先の行事を見据えた（これから行う事の宣伝と集客を目的とした）前向きな学校便りの作成を行った
- ⑧現地にある日本企業へ、駐在員の方への「帰国後」の子どもへの教育に対する意識啓発を求めた
- ⑨小学校からの進路指導に力を入れ、進学指導にとどまらない生き方教育に力を入れた
- ⑩中3生に対しては日本における進学を考慮し、日本の高等学校の情報収集に徹底敵に力を入れ、一人一人のニーズに合った進学指導を行った

9. 雑感

前回派遣されたアラブ首長国連邦での経験も素晴らしいものでした。しかし、今回のアメリカ・ニュージャージー日本人学校での経験は、さらにエキサイティングなものでした。特に東京では始められている「学校選択制」以上にシビアな、保護者と子どもによる学校選択。自校を選んでもらい、「ニュージャージー日本人学校で学んで良かった」と言ってもらうための努力は、本当にやりがいのある仕事でした。

一方、仕事とは関係ないのですが、私の大好きな野球観戦（ニューヨーク・ヤンキース）ができたこと。それが一層仕事の意欲をかきたててくれました。

日本人として活躍する松井秀喜選手やイチロー選手の姿にいつも力をもらいました。ヤンキースを応援する人間であれば、どこの国籍であろうとすぐに仲間として扱ってくれるヤンキースタジアムの観客。全く英語がわからずとも、すぐに意気投合できたものです。最高の気分転換でした。」



世界各国に日本人の子どもたちがいます。「子どもたちに是非日本の教育のすばらしさを体感させたい。」その思いで今回も派遣を希望しました。結果として多くの子どもたちがそれを実感してくれたと確信しています。同時に私も子どもたち・保護者の方々から多くの感動や喜びをもらいました。

この3年間、全ての人に感謝してつきません。本当にありがとうございました。